

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

全国高校ラグビー大会で優勝を果たし、大学一年にして日本代表となった五十嵐だったが、その年の開幕戦で左足首を骨折してしまふ。翌年は肩、続く三年目のシーズンは膝と三年連続で開幕戦での負傷に見舞われてしまふ。日本代表復帰を目指す五十嵐は、痛みを耐え、治療とリハビリに専念する日々を送ってきた。今彼は四年生として同期の新条(キャプテン)、本田らとともに最後の開幕戦を迎えた。

二人がかりで、左右から止めに来る。五十嵐は身を沈めて、二人の腕を撥ねのけた。タックルが甘いんだ——内心、雄叫びを上げながら、まだはるか先にあるゴールラインを目指す。スパイクがしっかりと芝を噛む感触が頼もしい。① 行ける。とにかく行くんだ。

だが五十嵐は、状況を見失うほどには興奮していなかった。後ろにフォロワーが来ているのは気配で分かる。相手のマークを引きつけ、前に隙間が空いたところで、② 最高のパスを出してやろう。自分で突破するだけでなく、前進を演出するのも、フォワードの醍醐味だ。

五十嵐は少しだけ外へ流れて走った。相手のツインタワーの一人——ロックの片割れが迫って来る。確かに体は大きい、まだ線が細い感じだ。このまま突破できるかもしれないと思ったが、予定通り、パスをつなぐことにする。

十分引きつけ、軽く当たる直前に右へパスを出した。すぐに掴まえられたが、暴れて束縛から逃れる。

次の瞬間、嫌な音が立て続けに聞こえた。肉と肉がぶつかる衝撃音。体がグラウンドに叩きつけられる音。息が抜けるかすかな音。一瞬間を置いて、喉の奥から絞り出すような苦悶の声。

ホイッスル。

慌てて振り向くと、ボールが芝の上に転がっていた。その少し後ろで倒れているのは……新条。右膝を抱えて、転げ回っている。真っ青な顔を濡らしているのは、脂汗ではないかと思った。まずい。

五十嵐は瞬時に状況を理解した。横からタックルに入られたに違いない。去年の俺と同じ状況……そして、この事態を引き起こしたのは俺だ。ホスピタルパスを送ってしまったに違いない。パスを受ける時、選手は一瞬無防備になる。そのタイミングを狙ってはまるで、ラグビーを始めたばかりの素人ではないか。

五十嵐は新条の横に跪いた。硬い芝が、膝をちくちくと刺激する。

「大丈夫か？」

こんな台詞しか言えない自分が情けない。だが新条は、恐るべき精神力で、既に落ち着いていた。右膝を伸ばした状態で、何とか上半身を起こす。そのまま立ち上がるとしたが、右膝に力が入らないように、崩れ落ちてしまった。慌てて助けに入ると、逆に「すまん」と謝られた。

「お前は、別に——」

「申し訳ない」痛みのせい、情けなく思う気持ちのせい、新条の目には涙が浮かんでいた。「頼むぞ」

審判がホイッスルを短く鳴らし、救護班を要請する。新条は自分では立ち上がれず、担架で運ばれて行った。ベンチの方を見ると、リザーブの本田が、慌てて飛び出して来るところだった。この場であいつを入れるということは……自分がナンバーエイトに入らないといけないんだな、と判断する。予想した通り、本田が五十嵐を指差し、「エイト」と叫んだ。

早々、ファーストスクラムが組まれる。新条がボールを前に落としてしまったので、相手ボールだ。スクラムの一番後ろにつくのは試合では初めてだったが、練習ではこなしている。何とかなるだろう。

スクラムをぐっと押しこむ。相手チームは辛うじてボールを出し、スタンドオフがボールを外へ蹴り出した。ボールが出た地点へ向かいながら、五十嵐は気持ちが一気に落ちこんでいくのを感じた。

俺の代わりじゃないのか？俺が怪我する代わりに、新条が怪我した。それも、俺の下手なパスが原因で。ラインアウトの列に並ばなければならぬのに、気持ちが悪くなるようになってしまふ。

七人が並ぶラインアウトで、五十嵐は最後列だ。ぼうつとしてサインを聞き逃してしまい、気づいた時には、密集ができていた。慌てて後ろへ回りこみ、密集を押しこむ。バランスが崩れて、数人の選手が固まったまま、サイドラインを割った。もう一度、ラインアウト。

「おい」本田に腹を小突かれる。「ぼうつとしてるなよ」

「分かってる」

分かってるが故に苛立つ。味方に怪我をさせて、プレーに集中できなくて……今の俺は最低だ。とても、自分のプレーをアピールするどころではない。こんなことでは、復帰戦は最悪の結末になる。試合に勝つのは当然としても、自分が駄目だったら……。

「おい！」

ベンチの方から声が飛ぶ。見ると、担架で運び出された新条が、リザーブの選手二人の肩を借りて立ち上がっていた。右足は地面についていない。ああ、あれはやはり、俺と同じ怪我かもしれない。骨がどうなっているかは分からないが、おそらく靭帯じんたいをやられている。たぶん、シーズン中の復帰は無理だ。顔面から血が引き、一瞬気が遠くなる。あいつは本当に、俺の代わりに怪我したようなものではないか。

「五十嵐、あと、頼むぞ！」

それだけ言って、新条がベンチに腰こしを下ろした。あまりにも痛々しく、直視できない。しかし彼の言葉は、瞬時に五十嵐の頭に染み付いた。

「この試合は、お前がキャプテンだ」本田が言って、他の選手を見回す。全員が、一斉いっせいにうなずいた。

「ちよっと待て——」

「いいから、次行くぞ」本田が怒ったような口調で言った。「マイボールだからな」

そう、これから怒涛どとうの攻撃こうげきを始めなければならない。

□、か。

五十嵐は突然、全ての緊張きんちようかんと焦りあせが消えるのを感じた。この試合はたった今、俺に託たくされた。キャプテンの命令だから、従わざるを得ない。試合をコントロールし、勝利を目指して仲間を鼓舞する。

何が、「自分のために」だよ。「アピールするため」なんて、ただの嫌らしい考えじゃないか。

五十嵐は大きく肩を上下させた。俺は間違っていた。三度の大怪我。段々細く消えていく未来。生き残るために、自分の力を誇示こじすることしか考えていなかった。

そうじゃない。ラグビーは、誰か——チームメートのためにやるものだ。味方を信じて命を預け、たった一つの目的のために心をつにする。スポーツにおけるチームなど、極論すれば選手一人一人のエゴの固まりに過ぎないが、ラグビーだけは違う。私心を捨て、チームのために自分を犠牲ぎせいにしない限り、目標——勝利は遠のくばかりである。

三度の怪我は、自分に対する罰ばつだったのだ。俺はたぶん、天狗てんぐになっていた。それではいけないと教えてくれたのが、あの怪我だったと思う。

このままこの試合を続けていたら、俺は何も得られなかったかもしれない。痛みを耐えリハビリばかりしていた三年間で、<sup>④</sup>ラグビーの基本さえ忘れてしまっていたのだ。

集中。

この試合をリードする。自分のことはその後だ。<sup>⑤</sup>ラインアウトに並びながら、左の上腕じょうわんを摩る。新条が渡してくれた、目に見えないキャプテンマークがそこにあった。 (堂場瞬一『クラッシュヤー』より)

#### 【語注】

\*1 ホスピタルパス … そのパスが原因となり、相手が病院に運ばれるような怪我を引き起こすことになる、味方に送ったパス。

\*2 ナンバーエイト … ラグビーの試合で攻守の要かなめとなり、チームの中心的な役割を果たす選手のこと。

問一 〓 ①「行ける。とにかく行くんだ」と、〓 ②「最高のパスを出してやろう」には、五十嵐のどのような気持ちが表れていますか。わかりやすく説明しなさい。

問二 〓 ③「情けなく思う気持ち」とは、どういうことに対しての気持ちですか。最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 五十嵐が怪我の状況や痛みは誰よりもわかるはずなのに、月並みな言葉しか思い浮かばないこと。  
イ 五十嵐が自分のことばかり考えタイミングを確認せずに出したパスで、新条に怪我をさせたこと。  
ウ 新条が信頼を寄せている五十嵐からのパスを受けた後、相手のタックルを防ぎきれなかったこと。  
エ 新条が主将としてチームをリードする立場でありながら、怪我のために試合を続けられないこと。  
オ 新条が長年ともにラグビーを続けて、信頼を寄せていた五十嵐から素人じみたパスを受けたこと。

問三 □にあてはまる語を、本文中から探して書きなさい。

問四 〓 ④「ラグビーの基本」とはどのようなことですか。説明しなさい。

問五 〓 ⑤「ラインアウトに並びながら、左の上腕を摩る」とありますが、ここでの五十嵐の心情をわかりやすく説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一年とちよつとぶりで、イタリアに行こうと決めた。約束の期日に間にあわせられるかどうか、気ばかりあせる仕事をいくつもかかえる毎日で、こんなことをしてはロクなことにならないと、まるで自分の時間に急ブレーキをかけるようにして、旅を思い立ったのだった。会いたい人たちにだけ会って、話したいことだけ話して、さっぱりして帰ってこよう。

出発の日が来て、私は、例によって旅立ちの不安（バスは定時に空港に着くだろうか、バスポートはちゃんと持っているだろうか、家の戸締まりはあれでよかったか、ローマの空港では友人が電話で話したとお待っているだろうか）にくしゃくしゃになりながら、朝早いターミナルにいた。

空港までのリムジン・バスを待つ列に、たぶんうつとうしい顔をして並んでいた私のすぐまえで、少年がふたり、こちらは旅行に出ることがただうれしいのだろう、仔犬こいぬみたいにはしゃいで、追いかけては捕つかまえてこをしていた。十一、二歳といったところだろうか、Tシャツに半ズボンという簡単な服装の、手足がすらりと伸びた動作のうつくしい少年たちで、そのことがまず私の注意をとらえたのだった。見るともなく見ていると、少年たちはどうやらふたごらしい。おなじ服装というのではないが、ふたりの動くリズムが、まるでこころよい音楽のようにぴったりと合っている。それに、どこかひよわそうなどころがありながら、いや、そのひよわい感じのせいなのかもしれない、ふたりにはなにか見るものの目をひきつけるふしぎな魅力みりよくがあった。いったいこれはどういうことだろう。旅立ちの不安も忘れて、私はその少年たちに見とれた。そして、彼らが手話でふざけあっているのに気づいた。

少年たちの姉さんなのだろう、三、四歳年長と思われるすらりと背のたかい少女が、これも手話で、いつときもじっとしていない弟たちをたしなめている、その三人のなぜか初々しい自然さに、私はそのまま彼らの世界に吸いこまれていった。

そのうち、少年のひとりが相手をかわそうとして足で触れた小型のリュックが、私の足もとにころんと倒れてきた。リュックは、一目でそれとわかる。トウコンAはやりのイタリア・ブランドで、私には、バンコクBキをおもわせるあかるいその色彩しきさいが、このきょうだいたちがいま始めようとしている旅へのときめきをきつちりと表現しているように思えて、ちよつと足をひっこめただけだった。すると、私の足もとにころがったリュックを手でおこしながら、少女が、ちいさな声でいった。ごめんなさい、いたずらな子たちで。彼女は、髪に手をやりながら、私にそうあやまると、弟たちには手話で、こんなことをして、とでもいつてるのだろう、ゆびさきに力をこめて話しかけている。リュックをころがしてしまった少年は、せつなそうに頬ほおをあらためて、私から目をそらせた。<sup>①</sup>

やがて時間どおりにバスが来て私たちは乗りこんだのだが、そのときはじめて、私は彼ら三人の母親らしい人がいるのに気づいた。バスのなかでは、まるで耳のきこえない少年たちをかばうように、姉娘がひとりの少年と、そしてきれいな横顔の姉娘によく似た細おもての、四十そこそこかと思われる女性がもうひとりの少年と、通路をはさんで、ふたりずつの席をとったからだった。彼らの席が私のすぐまえだったので、そのときはじめて、母親のよこにすわった少年が、すこしは聴ちゆうりよく力があるのだろうか、耳のうしろに小さな補聴器ほちゆうきをつけているのがわかった。バスが高速道路を走りはじめてからも、四人の家族は、まるで目には見えない機はたをおるように、素早く手先をうごかし、あかるい陽のひかりをとおすレースのようにゆびをからみあわせては、たのしげに会話をつづけていた。生まれてはじめて手話を見る気持で、私は、みごとに四人の会話を（じぶんではなにひとつ解読できないまま）目で追った。

彼らの手の動きが、なみはずれてうつくしいことに気づいたのは、かなりな時間がたつてからだったように思う。母親の手の動きはちいさくて、やさしく、娘の手はひらひらと蝶ちようのように舞う。少年たちのは、元気がよくて、大きく左右に振ふれる。どこの家庭にもあるように、きつと彼らだけに通用することばや感情も、いくつか、この手の動きで表現されているにちがいない。そして、私が彼らの話に見とれていたのが、彼らが手話で話していることめずらしさから、というのではなくて、手からはじまり、からだぜんたいにそれをつたえるようにする、そのしぐさの、音楽的な、といっている華はなやぎに、ちようど声のきれいなひとの会話に耳をかたむけるように見入っていることに気づいたとき、私のまえに<sup>②</sup>

手話、といういわばヒジDヨウEの手段を、こんなにも愉たのしげに、こんなにも人まえで気持よく使いこなせることも私たちの背後には、しっかりとした日頃の心づかい、たとえば靴くつを脱ぬいだらちゃんとするえなさい、そんな大きな声でおかあさんと呼ばなくても、ちゃんとときいてますよ、といった人間ぜんたいとしてのカンセイEのようなものが、たぶんこの母親らしい女性によって少年たちに伝えられ、みがかれていったのではないかと思いたって、私は、彼女かののうしろ姿をもういちど眺ながめた。

高熱がつづいたのだろうか、それとも先天性のものだったのか、いずれにせよ、ふたごで生まれた赤ん坊たちの聴力が、ほかの子のように機能しないとわかったとき、このひとはどんな暗い淵ふちをのぞいたことだったろう。それから立ちあがるのに、どれほどの時間がすぎたのだったか。こんなに肩をはらない、ふつうの姿勢で、しかも自分の人間としての豊かさをぜんぶこどもたちに伝えられるようになったのには、どんなきつかけがあつたのだろうか。それとも、すべては小さな毎日の積みかさねにすぎないのだろうか。タイヤの音をひびかせて走るバスのなかで、母親らしい、ものしずかな女性のうしろ姿を見ながら、私はこれまで歩いてきた彼女の日々を思いやった。こうやって、耳のきこえないふたりの息子たちの面倒めんどうを、半分は姉娘に見させながら旅に出ることができるようになるまでの彼女の時間が、いまの彼女のしずかさややさしい指と手の動きが、私にはかぎりなく大切なものに思えた。

バスが空港に着くと、うつくしい家族は私の降りるのよりひとつまえのウィングで降りていった。少年のリュックがイタリアのデザインだったので、うかつにもずつと旅がいっしょと思こんでいた私はなにやらがっかりしたけれど、<sup>④</sup>自分の旅立ちまでが彼らに祝福された気分だった。

（須賀敦子「ある日、会って……」の全文）

問一 〰〰 AとEのカタカナを、正しい漢字に改めなさい。

問二 ①「私から目をそらせた」とありますが、なぜですか。二十字以内で説明しなさい。

問三 ②「これまで知らなかったあたらしい世界がひらけた」とは、筆者がどういうことに気づいたということですか。最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 手話が、解読できない人にも、動きの美しさによっては大体の意味を伝える、ということ。
- イ 手話が、声による会話と変わらなくらい、明るさや華やかさに満ちている、ということ。
- ウ 手話が、話し手の人間性や心情を、声による会話と同じように豊かに伝える、ということ。
- エ 手話が、家族にだけ通じる複雑な内容を、声による会話よりも正確に伝える、ということ。
- オ 手話が、見慣れない人には、思わず見入ってしまう程の新しさを持っている、ということ。

問四 ③「彼女のうしろ姿をもういちど眺めた」とありますが、この時筆者は、「彼女」にどのような気持ちを抱いていますか。五十字以内で説明しなさい。

問五 ④「自分の旅立ちまでが彼らに祝福された気分だった」とはどういうことですか。筆者の気持ちの変化がわかるように、七十字以内で説明しなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 人間社会は「同じ」を繰り返すことで「進歩」してきた。「同じ」というのはたらしきの典型が言葉である。日本のなかに違う言葉が話す人たちがいると、やがて「同化」される。それが方言やアイヌ語に起こったことである。すでにおびただしい数の言語が滅びた。いまは英語が国際語だといわれている。インターネットの普及によって英語はさらに広がり、中国語はやがて北京語に統一されていくのではないかと予測もある。中国語の場合、ケータイへの入力アルファベットつまり発音に依存し、それなら発音が「正しく」ないと、目的の漢字が出てこないからである。② そのうち日本語はかつてのアイヌ語になるかもしれない。それが「進歩」なのである。そこでは皆が「同じ」言葉が話す。その反動で、個性、個性とわめきだすのであろう。③ 挙げ句の果てに、心に個性があるなどと思ってしまう。

個性をいうなら、多様性というべきである。個々の独自性がいちばん大切なのではない。個々の独自性は、<sup>a</sup>それ自体が減びたら、それまでである。なにしろ諸行は無常なのだから。多様性とは、さまざまな「違ったもの」が調和的に存在する、存在できる、という状態である。それを私はシステムと呼ぶ。生態系Ⅱエコシステムは生物多様性を維持する。なぜ世界的にその「違ったもの」が危機に陥っているか、すでにおわかりだと思ふ。「同じ」「同じ」をひたすら繰り返すだけでなく、<sup>b</sup>それを「当然として強制する」世界では、多様性は失われていく。

すでに述べてきたように、「違い」は感覚世界に由来する。それなら感覚世界をたえず「脳裏に存在させなければならぬ」。それぞれ違ったものこそが、真の意味での「現実」である。現実には人によって違う。一言で言い表わすことができない。一言でいうためには「同じ」にしてしまわなければならない。だからたとえば「なにごとにも <sup>\*</sup>アツラーの思し召し」ということになる。「同じ」を繰り返す意識が、その意味での多彩な現実を嫌うことは、むしろ当然であろう。現実Ⅱ感覚世界を、意識はできるだけ「同じ」に変えていく。「そのほうが便利だから。そのほうが楽だから」と人々はいふ。

④ 環境省がいくら頑張っても、多様性の説明がむずかしいわけである。説明するほうだって、現代人であり、官僚である。そもそも言葉にすれば、五百万種を超えるという昆虫が「虫」の一言となり、十億を超える人たちがただの「中国人」になる。官僚なら言葉つまり情報を扱<sup>あつか</sup>うしかなく、言葉や情報はひたすら同一性の上に成立する。だからこそ私は、「言葉は感覚世界と概念世界をつなぐだろうが」

とわざわざいわなければならぬのである。言葉こそが「同じ」と「違う」の間で、<sup>⑤</sup>微妙な釣り合いを保つ。そこを「怠けたら」、世界はひたすら同一化する。

へ A 〳お役所なら、「数字なら扱うが、実体は扱わない」。数字にすれば、十人の人は要するに十である。個別の実体としてみれば、十人の人だけでも、やたらに面倒なものだといふしかない。へ B 〳、

「そんなややこしいものなんか扱ったら、仕事にならない」

「規則は規則だろ」

「そんなことはできません」

お役所はたえずそう繰り返す。ついには、

「本日の交通事故、死者一名」

となる。感覚世界で、それこそ唯一無二の存在である、ある人が失われても、意識の世界はそれを「一名」で済ませる。それで「人命を尊重せよ」と、お題目をいう。人命一般というものが、この世にあるのか。

へ C へ、人はその二つの世界に住むしかない。現に住んでいるからである。感覚を消すことも、意識を消すこともできない。それなら「同じ」を繰り返して階層をつくる一神教的世界に対して、「違う」感覚世界と「同じ」概念世界を往復するだけで、「同じ」という世界を「上に上ろうとしない」日本人は、珍しい存在ではないのか。そうだからこそ、逆に⑥多様性の維持に関して、利点を持ち、持つて来たはずである。

そのような「上に上がらない」態度を「思想がない」と難じる、へ D へ「ケチな思想だ」と否定するのがふつうだった。へ E へそれは裏の利点を無視している。いざというときは柔軟に対応できる、安定した世間を維持できる、そういった利点はあまり指摘されない。すでに与えられてしまったものは、当然だと思ってしまうからである。

いまや日本の外国からの収入の割合は特許収入だという。外国のマネばかりしているという批評はどこに行ったのか。海外資産は英国を抜いて第一位になるのではないかといわれる。懸命に働いたのが、まったくムダだったわけでもない。この国も、立派だといえないかもしれないが、戦後の廃墟のなかから、それなりになんとかやってきた。ここまで「文明化」しても、山林面積が国土の七割に近い国家は世界にないということを思うべきであろう。

日本の思想が「自然という実体」を基礎としていることを、すでに述べた。それが「実体に対する暗黙の確信」を維持する。その自然をこれ以上破壊してはならないし、破壊すべきではない。

話は山林に限らない。近海の荒れ方は、おそらく想像を絶するであろう。しかし海の底は、日常目に見えない。見えない以上、感覚はなにもいわない。以前はどのように豊かだったか、それも見ていないからである。土壌の中の生態系がどう変化しているか、これも見えない。見えないから、平気ですべてをコンクリートで埋めてしまう。逆にそれを救うのは、見えないものを見る目、概念世界である。そう思えば、感覚の世界から概念の世界へ、概念の世界からふたたび感覚の世界へと、「健全な」往復を繰り返すしかない。それを⑦真の「科学的な態度」という。私はそう思う。

(養老孟司『無思想の発見』より)

### 【語注】

\* アッラー：一神教であるイスラム教の神。

問一 —— ①「人間社会は『同じ』を繰り返すことで『進歩』してきた」とありますが、筆者は「進歩」するとは、人々の暮らしがどうなることだと考えていますか。簡潔に答えなさい。

問二 —— ②「そのうち日本語はかつてのアイヌ語になる」とありますが、これはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問三 —— a～cの「それ」について、それぞれが指し示す内容を簡潔に答えなさい。

問四 —— ③「挙げ句の果てに」を言いかえらしたらどれがよいか、また、—— ⑤「微妙な」のこの文中での意味として最もふさわしいものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

③

ア	口が滑って
イ	とどのつまり
ウ	猫も杓子も
エ	根も葉もなく
オ	横車を押して

⑤

ア	いまにもくずれそう
イ	きわどくてどちらとも言い切れない
ウ	少しだけ不足した
エ	何ともいえずすぐれている
オ	何とも判断するのがむずかしい

問五 へ A へ C へ E へにあてはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは    イ しかし    ウ だから    エ たとえば    オ とはいえ

問六 —— ④「環境省がいくら頑張っても、多様性の説明がむずかしいわけである」とありますが、その理由として、最もふさわしいものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お役所は仕事は何より大切だから。
- イ 官僚は言葉を扱うしかないから。
- ウ 十人でも人は面倒なものだから。
- エ 人命一般というものはないから。
- オ 説明するのが現代人の官僚だから。

問七 —— ⑥「多様性の維持に関して、利点を持ち、持って来た」とありますが、日本人がそのようであった理由として、最もふさわしいものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人には概念世界だけしかなかったから。
- イ 日本人には感覚世界だけしかなかったから。
- ウ 日本人は概念世界よりも感覚世界を重視してきたから。
- エ 日本人は感覚世界よりも概念世界を重視してきたから。
- オ 日本人は感覚や概念とは別の世界を重視してきたから。

問八 —— ⑦「真の『科学的な態度』とありますが、これは現実の世界をどのようにとらえる態度ですか。わかりやすく説明しなさい。